

「沖繩スパイ戦史」大矢英代監督

軍隊は国民守らない

沖繩戦のかくされた真実

第二次世界大戦末期の沖繩戦では、陸軍中野学校が関わり、少年ゲリラ兵、マリアアがはびこる島への強制移住、住民同士によるスパイ虐殺などの悲惨な作戦が実行されました。長い間、語られることのなかったその実態と、今日の南西諸島の自衛隊基地をテーマとした映画、「沖繩スパイ戦史」を三上智恵監督と共同で監督した、ジャーナリストの大矢英代さんにお話を聞きました。

「戦争マリアア」と呼ばれる悲劇は現在どのように理解されているのでしょうか？
沖繩県内では戦争マリアアの取材や調査はこれまで多くされてきましたが、一般的なレベルでの理解度は低いです。「もう一つの沖繩戦」と呼ばれ、沖繩戦と区別されているように感じます。

紙芝居といえば「黄金バット」に代表される街頭紙芝居を思い浮かべる方が多いと思いますが、日中戦争が始まった1937年から敗戦の45年にかけては、人々を戦争に駆り立てるための宣伝メディアとして皇軍物語や勤儉貯蓄などを主題とした国策紙芝居が作られ、各地で上演されました。国策紙芝居とはどのようなものであったのか。国策紙芝居を収集し研究している、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターを取材しました。

紙芝居からみる戦時 街頭は統制、国策一色に



原田さん(左)と安田さん(右)

非文字資料研究センターの研究協力者である原田さんと、神奈川大学大学院歴史民俗資料研究科特任教授の安田常雄さんからお話を聞くことができました。

非文字資料研究センターでは241点の国策紙芝居を収集しています。これらの資料は2012年に作家の櫻本富雄さんのコレクションを、同研究センターが一括して購入したものです。実際に作られた国策紙芝居の総数は、残存しているものが約600点、他に約400点が目録などで存在していたことが分かり、1000点はあったであろうと考えられています。昭和初期の手書きの街頭紙芝居は、今現在でも沖繩ではなかなか知られていないです。

神奈川大学非文字資料研究センター

画劇という印刷紙芝居を流通させる組織ができます。しか



「空の軍神」の加藤少将として知られる加藤建夫を描いた、日本教育画劇発行の「空の軍神加藤少将」

紙芝居作者では似顔絵漫画で有名な近藤日出造のような人もいました。しかしほとんどの作者がどういった経緯で紙芝居に携わったかはよく分かっていません。「昭和初期のインテリの失業が画家や脚本家に大きく作用し、紙芝居

へ吹き寄せられたのではないかと原田さんは推測します。どこで誰が紙芝居を上演していたのか。安田さんは「総力戦体制下の政策の媒介となつていくので、実際にやる場所も町会とか当時の常会とかですから、基本的には見るのは大人」であり、「演じた人は地域の人望家です。僧侶、教員、あと役所関係者です」と指摘します。また植民地などでも紙芝居は上演され、とくに台湾では熱心な日本人教師が子どもたちに見せていたよう

最後に、安田さんは「総力戦」という大きな時代の流れのなかで、統合されていくという力が猛烈に働きます。ですから多分抵抗もあった。統合される中で矛盾やきしみが当然あります。そこまで踏み込んで戦時体制制つて何だろうかというふうを考えることが大切なテーマです。後は画家、脚本家、上演者、見ていた人、そういった人の振る舞いをおして時代が見えてくるのではないかと国策紙芝居研究の意義を語ってくれました。



大矢さん

や、軍の作戦が存在したことなどが明らかになっていまして、その後は遺族たちが政府に対し国家補償請求運動を起しました。しかし、それ

でも、関心の高い人が知っている問題というまでで止まっています。

軍機保護法下 殺された住民

「住民同士が殺し合うスパイ虐殺をどう考えますか？」

沖繩戦では、敵の砲弾や戦闘ではなく、スパイ容疑や秘密漏えいの防止のために殺害された住民たちがいた。しかし、これは戦争という異常な環境下で偶発的に起きたことではなく、背景には「軍機保護法」という、軍の秘密を洩らしたものは死刑に処すという法律がちゃんと存在していた。しかも、沖繩だけではなく、全国に適用されています。おそらく同じような事例はあ

ちここにあったのではないかと。空襲を受けたあとスパイ探しが始まっていたかもしれない。「日本が負けるはずがない」と信じ込まされていた時代ですから、「敵の攻撃を受けることなどあり得ない」「住民の内部に密告者がいるはずだ」などという疑いが多分あちこちにあったのではないのでしょうか。

恐ろしい法律を背景にして、誰かが裏切れば、自分が犠牲になる」という恐怖が生まれ、住民同士が互いを疑い、傷つけ合う悲惨な末路を辿ってしまった。それは砲弾が飛び交う戦場で亡くなっていくことと同じくらい恐ろしいことではないかと思えます。

基地あれば安全か 思考停止でなく自問を

基地あれば安全か 思考停止でなく自問を

「沖繩の自衛隊基地について沖繩戦から何が見えますか？」

「抑止力がある」という簡単な

発想で思考停止に陥ってしまう。でもやはり自問してほしい。何から何を守ろうとしているのか。南西諸島に自衛隊を誘致することで、逆に緊張を生み出し、危機を招いてしまつてはいないか。それは73

年前の沖繩戦をみれば、日本の基地があつたがゆえに攻撃的になり、さらにその基地を本土決戦の拠点とするために、アメリカ軍が上陸して地上戦になった。基地があつたために地獄の戦場と化した沖繩戦の経験を見れば分かることです。だから基地があれば安全、その力を守りたい、というのはすごく安易で、恐ろしい未来を招く発想なのではないかと思えます。私たちが持っている平和憲法は国際紛争を解決する手段として武力行使を放棄しているわけです。でも中国は怖い、北朝鮮は怖い。だったらなぜ対話をしないのかという話になってくると思うのです。対話の努力をしないので、まず武力強化

というのを考えるというので、沖繩戦の中から見えて

というのは、今の私たちの、戦後、日本がこの憲法のもとで生きていくのだと決めた精神と相反するものだと思います。

民衆が捨てられる恐ろしさ

「どのような人にこの映画を観てもらいたいですか？」

沖繩について知らない人たちにぜひ観てもらいたい。沖繩戦は遠い過去の出来事ではなく、今も続いているということがよく分かってほしい。沖繩の人たちがなぜ基地にこれだけ反対するのか、戦争はだめだと言いつつ続けるのか。沖繩本島南部に代表される砲弾が飛び交う地獄のような戦場からでは見えてこない真実をこの映画で描きました。民衆が国策の中で利用されて、互いに監視し合ったり、裏切りあったりして、最後は丸めて捨てられてしまった。そういう恐ろしさがこの秘密戦、スパイ戦の中から見えて

くるところです。沖繩戦では、戦闘に巻き込まれた住民たちは、純真無垢な、かわいそうな被害者だった。悪いのは全て日本軍だ。というのはい面ではそうなのですが、でも一方で、日本軍に協力してしまった住民たちがいたことや、銃をもって戦わされた沖繩の少年たちがいたことなどは知られていないと思います。そうやって沖繩県民も国防の名の下に、銃を取らされて戦わされた。その史実一つだけとつてもやはり埋もれさせてはいけな

いと思います。自分自身が被害者になる恐ろしさだけではなく、加害者にすらなってしまう可能性があることを、沖繩スパイ戦史の中から、感じ取ってもらえたらと思っています。だから、特に子どもを持つ世代の人たちにも見てほしい。もし戦争になったら自分たちの子どもが戦争に使われるということを考えてもらいたいです。